



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	全身清拭援助時の安楽を測定する試み：冷感，爽快感，疲労感と影響する要因について
Author(s)	加藤，圭子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要，10，19-27
Issue Date	1997-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37627
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_19-28.pdf



原 著

全身清拭援助時の安楽を測定する試み — 冷感, 爽快感, 疲労感と影響する要因について —

加藤 圭子

Trial on Measurement of Comfort at Bed Bath Care —About Cool Feelings, Comfortable Feelings, Feelings of Fatigue and Affected Their Factors—

Keiko Kato

Abstract

A trial on measurement of comfort at bed bath care was performed concerning nineteen cases. The findings as follows:

1. Their cool feelings of the chest were significantly negative correlated with the temperature of hot water.
2. Their comfortable feelings of footbath were significantly negative correlated with the care time.
3. Their cool feelings of the lower extremities were significantly positive correlated with their feelings of fatigue.

Key Words: bed bath, footbath, cool feeling, comfortable feeling, feeling of fatigue

〈要 旨〉

全身清拭援助時の安楽を測定する試みを19事例について実施し、次のような結果を得た。

1. 胸部の冷感と湯の温度との間には有意な負の相関関係が認められた。
2. 足浴の爽快感と援助時間との間には有意な負の相関関係が認められた。
3. 下肢の冷感と疲労感との間には有意な正の

相関が認められた。

キーワード：全身清拭, 足浴, 冷感, 爽快感, 疲労感

I. はじめに

全身清拭は、安静臥床を要するなど、入浴やシャワー浴ができない人に対する、日常生活上

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

の重要な援助の1つである。

安静臥床者を対象とした全身清拭の援助では、全身の皮膚外表を清潔にするとともに、クライアントを疲労させず、保温に留意して、クライアントに爽快感もたらしことが肝要である。

しかし、全身清拭の際の、クライアントの疲労、保温、爽快感などに関しては、これまであまり研究がなされておらず、湯の温度（以下、湯温と記す）や拭く速度と清拭部位の温度感覚を測定した研究¹⁾、全身清拭前後の快適性・不安定・疲労感を調査した研究²⁾、背部清拭時の湯温と快感を調査した研究³⁾などが散見される程度である。

著者は全身清拭の授業科目（基礎看護技術Ⅱ）を担当しているが、教科書の内容を検証した適切な研究がなく、授業資料に困ることがある。

また、基礎看護技術Ⅱでは学内実習を行っており、学生は互いにナース役、クライアント役を経験し、クライアントにとって安全・安楽な看護技術を考えて実施することを目標の1つとしている。しかし、クライアント役の反応を確かめながらナース役を経験し、実習後に話し合いをしても、そのとらえるところは5W1Hが判然とせず、従って有意義な考察に結びつかないことが少なくない。

以上のことから、全身清拭の学習を終えた学生たちとともに、全身清拭の際のクライアントの疲労、保温、爽快感の状態を明らかにし、それらに関与する要因を明らかにするために、全身清拭の湯の量（以下、湯量と記す）、湯温、時間、清拭回数と、クライアントの体表面積、冷感、爽快感、疲労感などを詳細に測定し、それらの関連や学生たちの学びについて検討を加えたので報告したい。

II. 方 法

1. 対 象

看護学科1年生80名が8名ずつの10グルー

プに分かれ、各グループ2名のクライアント役を対象に、全身清拭と足浴の援助を行い、以下の事項を測定した。なお、クライアント役は計20名であったが、1例に測定ミスがあったため、本研究では19事例を研究対象とする。

2. 全身清拭の方法

全身清拭と足浴の方法は氏家の教科書⁴⁾に基づき、石鹸用とすすぎ用のベースンを使用する部分のみ拙著⁵⁾を参考とした。また、ウォッシュクロス⁶⁾の絞り方は、大石他⁶⁾による「縦絞りa」に統一し、ウォッシュクロス⁶⁾の手の巻き方は、氏家I型⁷⁾に統一した。拭き方に関しては、氏家の方法¹⁾に準拠し、30cmの間隔を1往復1.5秒3往復することを基本とし、クライアント役が快感を感じるよう加圧することとした。なお、ベースン内の湯量は2～2.5lと決めていたが、湯温を適温に調節する必要があったために、湯量は必ずしもこの範囲内とはならなかった。さらに、体位の安定をはかる援助については、今回は、足浴時、膝下に大ピローを入れること、および側臥位時には大ピローを抱かせることのみを統一して実施した。

3. 測定事項

- (1) クライアント役の条件：性、年齢、体表面積（身長と体重を測定し、デュボワ式⁸⁾日本人用補正で算出した）。
- (2) 清拭部位別の経時的変化：
 - ① 室温（DIGITAL THERMO HYGROMETER FCTH-880、東京硝子⁹⁾）。
 - ② 時間の経過。時間の測定にはストップウォッチ SEIKO 1-5 SEC. QUARTS 8A 20-0010-ZO を使用した。
 - ③ 湯温と湯量（何℃の湯を何l加え、実際何℃何lで実施したか）。なお、湯温の測定には温度計17-257-02、¹⁰⁾ナビスを使用した。
 - ④ ウォッシュクロス⁶⁾を湯から出して以降、

表1 冷感・温感・爽快感・
疲労感の測定尺度

0	全く感じない
1	やや感じる
2	感じる
3	かなり感じる
4	大いに感じる

手に巻いて拭くまでの1回の時間と、その後、拭き終わるまでの1回の時間。使用したストップウォッチは②と同じである。

- ⑤ 清拭回数。
- ⑥ クライアント役の冷感、疲労感、爽快感を、表1に示した5段階の順序尺度で調査する。冷感、疲労感、爽快感に関しては、今回は表皮温等の生理値を測定していないので、各調査時点でのクライアント役の主観に依拠して調査することとした。
- ⑦ その他クライアント役が感じたことを具体的に表現する。

4. 会得したこと

以上の事項を結果としてまとめ、結果から何を会得したかを考える。

5. 研究時期

平成7年10月12日～同年10月31日。

III. 結 果

1. 測定の1事例

「II. 方法」の「3. 測定事項」に従って測定した結果の1事例を表2に示す。この事例は、任意に振り分けたグループのうちの第1グループの1番目の事例であり、表は、学生たちと一緒に測定した結果を、著者の責任で整理したものである。クライアント役の学生は、「汚れていたら恥ずかしいから」と、当日の朝、入念に入浴してきており、実際のクライアントとは異なり、殆ど汚れはなかった。

表を見ると、適温保持のために頻回に湯を交換していること、結果として使用湯量が多くなっていること、湯温が適切であったため、クライアント役に冷感を殆ど与えていないことなどがよくわかる。爽快感は十分に得られていたようである。下肢の疲労感は、拭く面積が広く、羞恥心を考慮した体位の安楽をはかることが難しかったためである。時間経過に関しては、清拭が進行するにつれてグループ内の連携がうまく作動するようになり、時間短縮ができるようになってきている。また、実際に清拭に必要な時間（ウォッシュクロスを湯から出して手に巻き、拭き終わるまで：合計39分51秒）に比して、全体の合計時間（56分35秒）が長かったのは、湯の交換に時間を要していること、この際、湯温と湯量を詳しく測定していたことなどのためである。

この事例ではないが、清拭を待っている間に冷感を感じた事例があり、実際に清拭に必要なだった時間以外の時間（以下、その他の時間と記す）、清拭以外の時間も算出する必要があると考え、それらを加えた資料を作成した。

2. 19事例の平均

19事例について、それぞれ、その他の時間、清拭以外の時間も加えた表2のような資料を作成し、この平均を算出したものが表3である。表3の中の数値は、すべて平均値±S.D.である。表の見方については、注釈を参考にされたい。

使用湯温はやや低めである。使用湯量は事例による差が大きい。これは、室温の違い（20～24℃）によって湯温低下の程度が異なっていたこと、湯温保持のために事例1のように頻回に湯を交換した事例と、バケツやベースンに蓋をするなどの湯温保持の工夫をし、湯温保持のための使用湯量の増加を減らす工夫をした事例があったためである。

清拭回数のS.D.は低いが、全体の合計時間の

表2 全身清拭測定の実例——クライアント役：19歳、女性、体表面積15,149.4 cm²——室温24℃

経過時間	清拭部位		湯 量		湯 温		ウォッシュクロスを 1回湯から出して		石鹸 使用後の 清拭回数	冷 感	温 感	爽快感	疲労感
			石 鹼 用	すすぎ用	石鹼用	すすぎ用	巻き 終える迄	拭き 終わる迄					
	顔・耳介			2.5l		48℃	30秒 4秒 6秒	2分 53秒 46秒		0	3	4	0
7分25秒後	左 上 肢		2.5l	-1.0l 56℃+1.0l	48℃	43℃ ↓ 46℃	34秒 19秒 11秒	1分17秒 57秒 46秒	2 回	拭いた直後 のその部位 1	拭いている 最中 3	力を入れて 拭いてもら い 3	0
12分35秒後	右 上 肢		-1.0l 55℃+1.0l	-0.5l 55℃+1.0l	44℃ ↓ 47℃	43℃ ↓ 48℃	14秒 12秒 13秒	45秒 45秒 55秒	2 回				
18分後	頸 部 胸 部		-2.5l 54℃+2.0l 17℃+0.3l	-1.0l 55℃+1.0l	47℃	45℃ ↓ 47℃	12秒 16秒 14秒	1分20秒 1分16秒 1分06秒	2 回	0	3	3	胸部清拭の 際は羞恥心 があり、上体 に力が入っ た 1
24分45秒後	腹 部		-2.3l 52℃+2.0l 17℃+0.2l	-1.0l 61℃+1.0l	49℃	44℃ ↓ 48℃	12秒 8秒 14秒	37秒 33秒 48秒	2 回	0	2	0	0
30分25秒後	左 下 肢	大腿	-2.2l 58℃+1.0l 17℃+0.3l	-3.0l 55℃+2.0l 17℃+0.4l	47℃	47℃	18秒 15秒 15秒	45秒 58秒 43秒	2 回	露出してい る部位 1	拭いている 最中 3	力を入れて 拭いてもら うと 3	下肢 3
		下腿			45℃	46℃	17秒 18秒 28秒	47秒 37秒 54秒	2 回				
38分40秒後	右 下 肢	大腿	-1.3l 52℃+1.5l 17℃+0.3l	-1.5l 59℃+1.0l	43℃ ↓ 49℃	41℃ ↓ 48℃	20秒 15秒 12秒	55秒 43秒 47秒	2 回				
		下腿			46℃	46℃	17秒 14秒 16秒	48秒 49秒 37秒	2 回				
47分後	足 浴			-1.5l 55℃+1.5l		41℃ ↓ 44℃		1分30秒 56秒 1分25秒 1分02秒		0	3	湯につけて いるだけで3 マッサージ されると 4	0
53分40秒後	項部・背部・ 腰部・殿部		-1.8l 55℃+1.2l 17℃+0.3l	-1.9l 55℃+1.2l 17℃+0.3l	48℃	48℃	9秒 9秒 8秒	1分25秒 55秒 1分01秒	2 回	0	2	側 臥 位 に な っ て 拭 か れ る の で 4	0
56分35秒後 終了 計56分35秒			計 12.5l	計 12.9l			計7分30秒	計32分21秒					
			合計25.4l				合計39分51秒						

注1：「ウォッシュクロス」を1回湯から出して「巻き終える迄」はナース補助者役が絞ったウォッシュクロスを手で絞る迄の時間、「拭き終わる迄」はそのウォッシュクロスで清拭した1回の時間を指す。

注2：湯量の「-」は捨てた量、「+」は加えた量を指す。

注3：使用した湯の温度は下欄の高温の方である。

S.D.は高く、このことには、その他の時間のS.D.の高さが最も大きく関与している。つまり、グループ内の連携がうまく作動し、その他の時間を少なくできた事例とそうではなかった事例のあることがわかる。

クライアント役の冷感、上肢で最も強く、下肢、頸部・胸部がこれに次いだ。爽快感は、足浴で非常に高く、全事例でかなり～大いに感じるとなっており、項部・背部・腰部・殿部がこれに次いだ。疲労感、クライアント役が健康な若い学生たちであったためにあまり感じら

れておらず、下肢でのみ点数が高かった。

3. 冷感・爽快感・疲労感に関与する要因

各部位の冷感と、各部位別の湯温と各時間との関係を調べたところ、有意に相関関係が認められたのは胸部の冷感と湯温（石鹼用）の関係であった。図1に胸部の冷感と湯温（石鹼用）の関係を示す。相関係数は-0.60764で、1%水準で有意な逆相関を示した。図1の回帰直線は $Y = -20.12295X + 50.75820$ である。図2に胸部の冷感と湯温（すすぎ用）の関係を示した。相関

全身清拭援助時の安楽を測定する試み

表 3 全身清拭測定 19 例の平均 (数値は mean±S.D.) — クライアント役; 19.5±1.4 歳, 全員女性, 体表面積 14,899.0±852.1 cm² — 室温 21.9±1.2°C

清拭部位	使用湯量 (l)		使用湯温 (°C)		ウォッシュクロスを湯から出して以降の時間 (秒)					清拭回数 (回)	冷 感	爽快感	疲労感
	石鹸用	すすぎ用	石鹸用	すすぎ用	巻き終える迄	拭く時間	その他の時間	経過時間	拭く以外の時間				
顔・耳介	—	2.5±0.8	—	48.6±4.1	68.3±35.4	168.0± 95.0	148.1± 99.0	391.5±125.5	216.4± 94.5	2.6±0.7	0.3±0.4	1.6±1.2	0.1±0.2
左上肢	2.3±0.9	2.7±1.0	45.7±4.0	46.2±3.2	80.8±29.8	255.1±151.9	166.5±132.5	512.5±219.8	230.7±126.8	3.1±0.3	2.4±1.0	1.3±1.1	0.8±1.1
右上肢	2.4±1.1	2.6±0.9	44.3±3.4	45.6±3.8	68.1±24.4	202.2±101.5	169.8±132.0	450.0±178.0	237.8±137.6	3.1±0.4			
頸部・胸部	2.4±1.1	2.5±0.9	47.3±3.9	47.6±3.3	75.7±22.7	253.5±120.0	166.5±101.8	503.8±118.9	242.2±100.1	3.5±0.9	1.7±1.2	0.7±0.8	0.6±0.8
腹部	2.4±1.1	2.7±1.1	46.2±4.0	47.5±4.1	66.4±33.1	149.4± 80.9	140.3±113.2	361.1±132.4	206.7±125.6	3.1±0.5	1.3±1.2	0.7±0.8	0.4±0.9
左下肢	2.4±1.1	2.7±1.0	46.8±4.9	47.6±3.9	63.4±19.7	229.3±110.8	210.9±140.8	516.1±189.3	274.3±140.3	3.3±0.6	1.7±1.6	1.4±1.1	1.7±1.6
右下肢	2.4±1.1	2.7±1.0	45.0±3.8	46.2±3.2	65.8±23.4	223.0± 97.7	208.9±149.4	510.2±186.9	274.7±150.0	3.3±0.7			
足浴	—	2.8±1.1	—	39.3±2.9	—	382.3±241.3	261.9±188.9	658.9±221.1	261.9±188.9	4.0±0.0	0.4±0.7	3.6±0.7	0.3±0.7
項部・背部 腰背・殿部	2.2±0.8	2.4±0.8	47.0±3.2	47.5±2.5	55.1±17.3	198.9±108.0	228.4±177.1	492.4±166.7	283.5±181.3	3.2±0.5	0.7±1.0	2.3±1.2	0.5±0.7
計	8.4±2.4	12.5±3.9			計	535.9±98.1	2,090.1±808.2	1,699.7±953.4	4,325.7±952.2	2,235.6±972.5			
	合計量: 20.9±5.4l					全体の合計時間: 4,325.7±952.2 秒							

- 注 1: 「巻き終える迄」は、ウォッシュクロスをナース役が手に巻き終える迄の時間の部位別合計, 「拭き終わる迄」はそのウォッシュクロスで清拭した部位別合計時間を指す。
 注 2: 「経過時間」は「巻き終える迄」「拭く時間」「その他の時間」の部位別合計である。
 注 3: 湯温は基礎表の部位別の湯温と湯量から 1l あたりの温度を算出して用いた。
 注 4: 部位別使用湯量を記載したため合計はその加算とは異なる。
 注 5: それぞれの時間は各部位別の合計時間である。

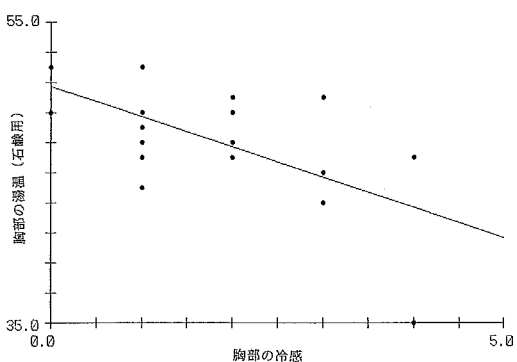


図 1 胸部の冷感と湯温 (石鹸用) の関係

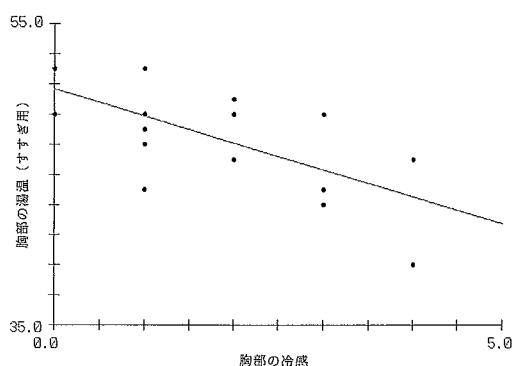


図 2 胸部の冷感と湯温 (すすぎ用) の関係

係数は -0.63909 で, 1% 水準で有意な逆相関を認めた。図 2 の回帰直線は $Y = -17.95082X + 50.69672$ である。つまり, 使用湯温が高いほど, 有意に冷感は低値を示した。

各部位の冷感, 爽快感, 疲労感, の間の関係を調べたところ, 有意に相関関係が認められたのは下肢の冷感と疲労感との関係であった。図 3 にこれを示す。相関係数は 0.49953 で, 5% 水準で有意な正の相関を示した。つまり, 下肢の冷感が強ければ, 有意に下肢の疲労感も高まることが示された。

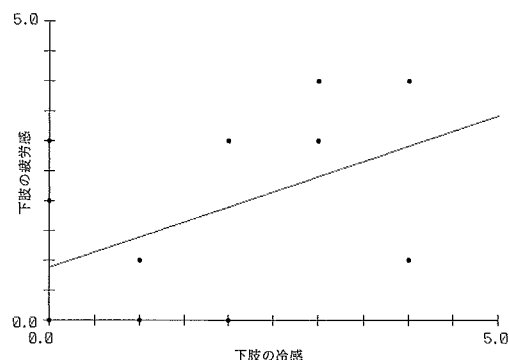


図 3 下肢の冷感と疲労感の関係

各部位の爽快感と、各部位別の湯温と各時間との関係を調べたところ、有意に相関関係が認められたのは足浴の爽快感と時間との関係であった。図4に足浴の爽快感と足浴実施時間(表3では、拭く時間欄に示した)の関係を示す。相関係数は -0.70457 で、 0.1% 水準で有意な逆相関を示した。図5に足浴の爽快感と足浴合計時間(表3では経過時間欄に示した)の関係を示す。相関係数は -0.51824 で、 5% 水準で有意な逆相関を示した。つまり、足浴時間がある程度短い方が、爽快感が感じられることが示された。

その他、疲労感と各部位別の湯温・各時間との関係や、体表面積と各合計湯量・各合計時間との関係を調べたが、有意で意味のある統計結果は得られなかった。

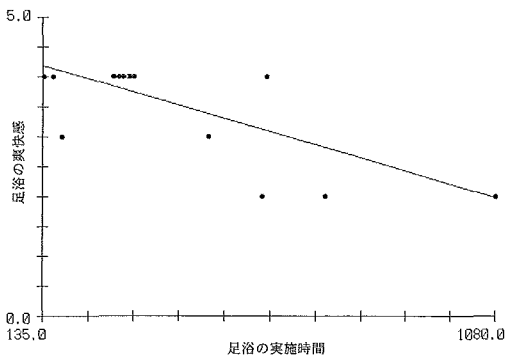


図4 足浴の実施時間と爽快感の関係

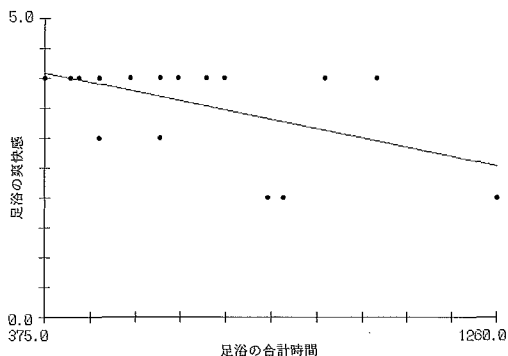


図5 足浴の合計時間と爽快感の関係

Ⅳ．考 察

1. 全身清拭の湯量・湯温・時間について

安静臥床者を対象とした全身清拭の際の室温は「 $24 \pm 2^\circ\text{C}$ が適しており」、湯温はナースが「手を入れてタオルをすすぐことができる最高温度($50 \sim 52^\circ\text{C}$)と準備中の温度低下を考慮して $50 \sim 54^\circ\text{C}$ とするか、熱湯を準備する」と教科書⁴⁾には書かれている。手を入れてウォッシュクロスをすすぐことができる最高温度は $48 \sim 50^\circ\text{C}$ 、楽に手を入れてウォッシュクロスをすすぐことができる温度は 45°C とした文献もある⁶⁾。

今回の測定では室温は $20 \sim 24^\circ\text{C}$ であり、看護実習室の設備上、室温を上昇させることはできなかった。クライアント役の保温のために、学生たちは綿毛布を2枚重ねる、綿毛布の上に毛布をかけるなどし、クライアント役に冷感を与えない工夫をした。また室温が低かったために湯温が低下しやすく、使用湯温保持の工夫は次の2点に分かれた。①頻回に湯を交換する、②バケツやベースンに蓋をするなどの湯温保持の工夫する。①では湯の交換のために時間がかかり、時間がかかったために湯が冷め、さらに湯を交換する結果となり、使用湯量が増え、経過時間(特にその他の時間)は長くなった。②では①に比べて使用湯量は少なく、経過時間(特にその他の時間)も短くなった。これらの結果として、19事例の平均(表3)を見ると、使用湯量と時間(特にその他の時間)のS.D.(事例間差)は大きくなったと考えられる。

安静臥床者を対象とした全身清拭の経過時間に関する報告はない。経験的には、クライアントの疲労を考慮して、足浴を除く全プロセスを $20 \sim 30$ 分以内におさえ、これより時間がかかる場合には1回の清拭を部分清拭にとどめるようである。しかし現在の病院では清拭車の蒸しタオルを使うため石鹸を用いた全身清拭との比較はできない。学生の病院実習で石鹸を用いた全身清拭(足浴を除く)を行った際、約1時間か

かってしまったことがある。いずれにせよ援助を要するクライアントの安全と安楽を考慮すると今回の清拭時間は長く、特にその他の時間が長かった。この理由として、上述の①のように、室温が低く、湯温保持のために頻回に湯を交換した結果、湯の交換のために時間がかかり、時間がかかったために湯が冷め、さらに湯を交換する時間がかかったこと、湯温・湯量を頻回に測定し、1回の清拭ごとにクライアント役の感想を詳しく聞いていたために時間がかかったこと、などが考えられる。その他の時間が短かった事例では、グループ内の連携機能がうまく作動していたようで、当然全体の時間も短かった。

使用湯温と冷感との関係を事例別に見ると、顔・耳介では42℃以下で冷感を感じ、上肢では全例で冷感を感じており、52℃でも冷感を与えていた。52℃の事例の室温は22℃であり、クライアント役が冷感を訴えたところから、学生たちは上述したような保温の工夫をするようになった。52℃以上の湯を用いることは学生には不可能だったからである。この事例のウォッシュクロス巻き終わるまでの時間は平均よりやや長かったため、清拭時のウォッシュクロスが冷めてしまった可能性はある。今回の測定では、実際にクライアント役の皮膚表面にあたるウォッシュクロスの表面温度やクライアント役の部位別の皮膚温を調べたわけではないので、これ以上のことは不明である。頸部・胸部では16事例で冷感を感じており、湯温52℃・室温24℃でも冷感を訴えている事例がある反面、湯温49℃・室温21℃でも温感を感じている事例もあった。腹部では湯温49℃・室温21℃で冷感を感じている事例があった。下肢では11事例で冷感を感じていた。足浴では冷感を感じた4事例があった。項部・背部・腰部・殿部では、使用湯温は頸部・胸部よりやや低かったが、冷感を感じたのは8事例であった。背部は冷覚が発達しているため、他の部位より熱めの清拭が心地よさをもたらすとされているが⁷⁾、今回の測定

では、項部・背部・腰部・殿部清拭の心地よさ(爽快感)の点数は高かったが、湯温や冷感との関係は、事例別にも見られなかった。

学生たちは、準備した湯の温度低下が予想よりも速いことや、その結果クライアント役に冷感を与えてしまうことなどを学び、上述した湯温保持の工夫や保温の工夫をした。また、清拭以外の時間を短縮しなければ、クライアント役に冷感を与えてしまうことなどを学んだ。

足浴は学生たちの予想以上にクライアント役に心地よさ(爽快感)を与えた。その心地よさを、「あまりにも気持ちがよくて眠くなってしまった」と表現するクライアント役が多かった。足浴は全身清拭とは別個に独立して行うこともあり、就寝前の睡眠導入に効果があり⁸⁾、末梢皮膚温の上昇効果が大きいとされているが⁹⁾、今回の研究でもそのことがわかり、学生たちは足浴がクライアントの安楽にとって効果的な援助であることを学んだ。

なお、体表面積と使用湯量・経過時間の間には、なんらかの関係があると考えていたが、今回の測定ではそれらの関連は全く認められなかった。使用湯量や経過時間には上述したような他の要素が関係しており、クライアント役の体表面積に大きな違いがなかったことも加わって、このような結果が出たと考えられる。

2. 全身清拭の際の冷感・爽快感・疲労感と関与する要因について

19事例の冷感・爽快感・疲労感と関与する要因の平均について以下に述べる。

冷感が強かったのは上肢、胸部、下肢であった。結果の詳細な検討から、上肢と胸部では、肩の露出や肩をバスタオル1枚で覆っている時間が長く、肩に冷えのあったことが冷感に結びついており、下肢では、清拭面積が広く、このため露出やバスタオル1枚で覆っている面積が多かったことが冷感に結びついたようである。上肢の冷感が最も強かったが、この理由として

は、上記の肩の冷えとともに、手、手指、前腕、肘頭、肘窩、上腕、肩、腋窩と清拭が難しく面積に比して全事例で時間がかかったことも挙げられるように思う。上肢の場合は全事例の傾向であったため、上肢の冷感と時間との関係は認められなかったものと考えられる。胸部は冷感に敏感との報告もあり³⁾、図1と2に胸部の冷感と湯温との有意な相関係数を示した。また、統計的に有意ではなかったものの、冷感と湯温との間にはある程度の関連が認められ、全身清拭の使用湯温は高い方が好ましいとの示唆が得られた。

爽快感が非常に高かったのは足浴であり、背部がこれに次いだ。足浴と背部清拭の心地よさについては先に述べたとおりである。図4と5に、足浴の爽快感と経過時間との有意な相関関係を示したが、統計的に有意ではなかったものの、爽快感と経過時間との間にはある程度の関連が認められ、全身清拭の実施・経過時間はある一定程度短い方が好ましいとの示唆が得られた。

疲労感は殆ど認められず、下肢でやや高かった。下肢の疲労感が高かった理由としては、清拭面積が広く、大腿と下腿の前面、内側、外側、後面、膝間接部、膝窩などを拭かなければならないため、体位の安定をはかることが難しく、クライアント役に疲労感をもたらしたものと考えられる。図3に、下肢の冷感と疲労感との有意な相関関係を示したが、疲労感が殆どなかったため、その他の疲労感については関連性は認められなかった。

3. 研究方法について

今回の研究では、足浴を含む全身清拭の全プロセスについて、部位別に使用湯量、使用湯温、詳細な経過時間、清拭回数、クライアントの冷感、爽快感、疲労感を明らかにし、クライアントの部位別の冷感、爽快感、疲労感に關与する要因をある程度明らかにし得た。このような報

告例はこれまでになく、全身清拭実施の上で有用な報告をなし得たと考える。

クライアントの冷感、爽快感、疲労感に関しては、主観であるために個人差があり、個人差を明確にするためには手技をさらに統一するか、または個人差を無視してもよいだけのサンプル数を準備する必要がある。今後の課題として検討したいと考えている。

最後に、詳細な測定を行ったことは、学生たちが5 W 1 H を明確にし、クライアントにとってよりよい看護技術を考え工夫し実施する学びとなったと考える。

V. ま と め

足浴を含む全身清拭の全プロセスを測定する試みを19事例について実施し、次のような結果を得た。

1. 胸部の冷感と湯温との間には有意な逆相関関係が認められ、全身清拭の使用湯温は高い方が好ましいとの示唆が得られた。
2. 足浴の爽快感と実施・経過時間との間には有意な逆相関関係が認められ、全身清拭の時間はある一定程度短い方が好ましいとの示唆が得られた。
3. 下肢の冷感と疲労感との間には有意な正の相関が認められた。

＜引用文献＞

- 1) 氏家幸子：第Ⅵ章-A. 全身清拭に関する実験的検討。看護技術の科学的検証。p.175-198, 1977, メヂカルフレンド社, 東京。
- 2) 藤井郁代, 森田チエコ：患者の生理・感覚的側面に及ぼす全身清拭の実験的検討。神戸私立看護短期大学紀要, 創刊号：77-83, 1982。
- 3) 福沢睦子, 川口文子：清拭における爽快感と清潔度に関する一考察。日看護会集録（看護総合）, 第15回：9-13, 1984。
- 4) 氏家幸子：第2章-D-3-B-1. 全身清拭。基礎看護技術Ⅰ第4版。p.278-287, 1994, 医学書院, 東京。

- 5) 加藤圭子：第2章-9-5-C-1. 全身清拭. 小玉香津子, 坪井良子, 中村ヒサ編, 看護必携シリーズ1 看護の基礎技術Ⅰ. p.479-481, 1995, 学習研究社, 東京.
- 6) 大石杉乃, 大原宏子：「絞る」動作に関する一考察. 看護教育, 31(1)：33-38, 1990.
- 7) 川島みどり：第2章-V-6-3. 入浴に近い清拭技術の検討. 新訂生活行動援助の技術. p.160, 1987, 看護の科学社, 東京.
- 8) 川島みどり, 菱沼典子, 操華子他：第1部第3・4章睡眠を導く技術—足浴の効果. 川島みどり, 菱沼典子編, 看護技術の科学と検証, p.24-33, 1996, 日本看護協会出版会, 東京.
- 9) 尾山タカ子, 田中紀美子：清拭のケア技術. 臨床看護, 21(13)：1879-1884, 1995.